

支部だより

北海道支部からのたより

1. 北海道支部の歴史・過去の活動

支部の歴史・過去の活動を書こうとしても、支部には古い時代の資料が残っていないようなので、自分の記憶に残っていることを書くことにします。活動として最初にあげられるのは、この35年近く、支部例会を半日あるいは1日をかけて開催してきたことです。私が若かった頃には、支部例会で教授の先生の講演（教育講演？）も行われていました。これまでの支部長の努力に敬意を表したいと思います。支部の活動における問題は、支部例会をどこで開くかであり、北大に会員が集中しているため、毎回必然的に札幌で開くこととなります。そうすると、函館、室蘭、旭川などからの参加者に旅費の負担を毎年かけることになります。私が支部長るとき、これらの人の旅費の補助ができなくて、申し訳なく思った記憶があります。また、年会は約10年ごとに過去4回開催しました。これからますます共同研究が重要になるとは思いますが、後述のように、北海道支部の若者を中心としたネットワークができつつあり、北海道支部の若者による生物物理の発展が期待できると感じております。

(北海道大学 加茂直樹)

2. 現在の北海道支部の活動

現在は、通常、年度末に支部例会を開催しております。口頭発表による講演を行い活発な討議を交わす貴重な機会であり、北海道地区の多くの会員の参加する行事として定着しています。前回の支部例会は、2006年3月に、北海道大学にて開催されました。2005年の11月の北海道での第43年会終了後、初めての例会であり、例会中の支部総会にて、年会についての各種報告が行われました。札幌年会は、講演数1000題を超える参加で大きな成功を収め、これを機

会に、今後もより支部の活動を活発に行うべく、規約の見直しや連絡体制の整備を行うことが承認されました。また、この例会で、新たに支部講演会制度に関する規約が設けられました。これは、生物物理の分野で活躍される方々の講演会を開催する際、支部から費用の援助を行う制度で、この制度を利用し本年度はすでに10回以上の講演会が開催されております。

もう一つ、北海道支部で長年にわたり継続している大きな行事として、日本生化学会北海道支部、北海道分子生物研究会と共催している合同シンポジウムがあります（本年度は2006年12月25日開催、サブタイトル「生命現象の分子レベルでの解明」）。このシンポジウムには、毎年200名以上が参加し、北海道内の若手研究者を中心に幅広い生物科学分野の演者が講演を行い、交流を行っています。

北海道で活躍されている研究者の紹介も兼ねて、昨年度の支部例会プログラムを掲載させていただきます。本年度は2007年3月に北海道大学での開催を予定しております。支部例会と名付けておりますが、全国からの参加も無論歓迎しております。参加申込みなどについては、支部ホームページ (<http://altair.sci.hokudai.ac.jp/biophy/>) にて案内を掲載しておりますのでご参照ください。（北海道大学 相沢智康）

平成17年度 日本生物物理学会北海道支部例会 (2006年3月1日 北海道大学・理学部にて)

生細胞の伸縮変形に対する力学的応答:細胞内張力の履歴効果

○田村和志, 水谷武臣, 芳賀永, 川端和重 (北大・院理)

力学的牽引による染色体の凝集構造の解明

○池田健佑¹, 星治², 牛木辰男², 芳賀永¹, 川端和重¹ (1 北大・院理, 2 新潟大・院医)

コラーゲンゲル基質に特異的な上皮細胞の集団運動: 集団内における細胞形態の組織的な空間配置

○小椋隼人, 芳賀永, 川端和重 (北大・院理)

ゲル重層によって3次元培養下に置かれた上皮細胞が示す集団運動

○尾形元気, 芳賀永, 川端和重 (北大・院理)

蛍光相互相関分光法を用いた異常型プリオンタンパク質の検出

○藤井文彦¹, 堀内基広², 上野雅由³, 坂田啓司¹, 長尾一生¹, 田村守¹, 金城政孝¹ (1 北大・電子研, 2 北大・院獣, 3 富士レビオ株)

相関法によるリン光寿命測定

○西村吾朗, 白燦基, 田村守 (北大・電子研)

神経細胞の凍結保存における凍結保護剤の影響

○本村寿太郎, 内田努, 永山昌史, 郷原一寿 (北大・院工)

アラキジン酸 Langmuir Blogett 膜における分子再配列機構

○日比野政裕, 関原健二 (室蘭工大)

架橋試薬と質量分析法を用いた脳内グロビン蛋白質ニューログロビンの三量体 G タンパク質 α サブユニットに対するシグナル制御機構の解明

○北辻千展^{1,2}, 黒河内政樹², 西村紳一郎², 石森浩一郎², 若杉桂輔³ (1 京大・院工, 2 北大・院理, 3 東大院・総合文化)

NMRを用いたシトクロム c におけるシトクロム c 酸化酵素結合部位に関する研究

○坂本光一^{1,2}, 伊藤一新澤恭子³, 吉川信也³, 石森浩一郎² (1 京大・院工, 2 北大・院理, 3 兵庫県大・生命理)

磁性細菌 (MS-1) のマグネトソーム産生に関与すると考えられるタンパク質の同定

○澤田研, 黒木翼, 渡辺真悟, 岩佐達郎 (室蘭工大)

cDNA マイクロアレイ法と real-time PCR 法によるヨーロッパモノアラガイの長期記憶に関与する遺伝子の発現解析

○浅見幸代, 伊藤悦朗 (北大・院理)

アスパラギン残基の脱アミド化反応性を予測する際の良好な指標

○野中康宏, 秋枝大介, 相沢智康, 出村誠, 新田勝利, 河野敬一 (北大・院理)

新規 DNA 結合モチーフ (STPR) を構成するタンデムリピートユニットのヘリックス構造が果たす DNA 結合への寄与

○松本大祐¹, 齊藤伸¹, 相沢智康¹, 滝谷重治², 出村誠¹, 新田勝利¹, 河野敬一¹ (¹北大・院理, ²北大・創成研)

脂肪酸結合型 α -ラクトアルブミン作製法と細胞死誘導活性

秋元薫, 佐藤寿哉, ○相沢智康, 出村誠, 河野敬一 (北大・院理)

N4-acetylcytidine tRNA 修飾酵素の X 線結晶構造解析

○間仁田哲紘, チムナロンサリン, 姚閔, 渡邊信久, 田中勲 (北大・院理)

Noise analysis of non-selective cation channel currents activated by muscarinic stimulation with carbachol in bovine ciliary muscle cells

○Akira Takai, Yoshiko Takai, Motoi Miyazu (旭川医大・生理, 名古屋大・薬)

等温滴定型熱量計を用いたファラオニスハロロドプシンのアニオン解離定数の測定

○林早織¹, 宮内正二¹, 長谷川千紗¹, 出村誠², 加茂直樹¹ (¹北大・院薬, ²北大・院理)

海洋性細菌由来のロドプシン様タンパク質 proteorhodopsin の光プロトンポンプ能の pH 依存性についての解析

○田母神淳¹, 菊川峰志², 宮内正二¹, 加茂直樹¹ (¹北大・院薬, ²北大・創成研)

膜タンパク質ハロロドプシンはなぜトリマー形成するのか?

○佐々木貴規, 久保恵美, 神谷昌克, 相沢智康, 河野敬一, 出村誠 (北大・院理)

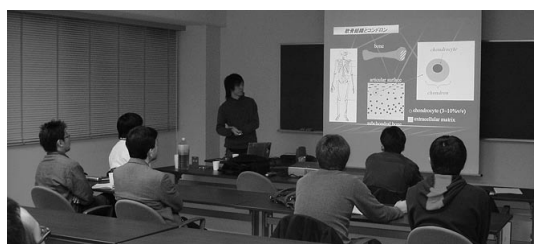
3. 若手活動への支援

支部例会や合同シンポジウムなどの支部活動は、正会員が中心となり企画・運営されてきました。これに加え、支部活動全体の活性化ということを考えると、今後の学会および支部を担う若手会員による積極的な活動が必要不可欠です。ご存知のように、学会本体には「若手の会」という全国規模の組織があり、毎年「夏の学校」を開催しています。しかしながら、「夏の学校」に参加したり、または運営に携わったりという北海道支部の若手会員はほとんどいないという状況が続いてきました（もっとも、いちばん暑い時期に北海道から本州へ旅行するには相当の覚悟が必要なのは確かですが）。このような状況が、北海道支部の若手会員における横のつながりを形成する機会を奪っており、結果的に若手による支部活動を妨げる一因となっております。そこで、若手会員が連携できる「枠組み」を北海道地区につくることを目的に、北海道支部の主導で「若手ネットワーク」という組織を立ち上げるに至りました。

北海道地区の正会員に趣旨を説明し、各研究室に所属する大学院生やポスドクから立ち上げメンバーを募ったところ、7つの研究室から21名（教員4名を



第3回セミナー参加者



セミナー風景

含む）が手をあげてくれました。このメンバーで今後の活動内容について話し合った結果、参加者が相互によく知り合うことがまずは重要であるということから、自分が所属する研究室を30分程度で紹介するセミナーを定期的に開催することが決定されました。

以上の準備を経て、記念すべき第1回のセミナーが2006年7月31日に開催され、3つの研究室の代表者による発表が行われました。発表内容は、自身の研究内容のみならず、研究室の歴史や人員構成、そして所有する実験装置の紹介から部屋の間取りにいたるまで、各自が非常に工夫を凝らしたものでした。聴衆からは普段目にする事のない他学部・他専攻の研究室の様子に対し、非常に多くの質問がありました。もちろん、セミナー終了後には懇親会（こちらがメイン？）が開催され、セミナー以上に活発な情報交換が行われていました。その後、9月8日に第2回、10月25日には第3回のセミナーが開催され、参加者の交流が深まると同時に、少しずつ新しい参加者も見られるようになってきました。さらに、第4回のセミナーでは、「ライフサイエンスにおけるビジネス」というテーマで企業に発表を依頼するなど、内容についても新しい試みを始めています。

立ち上げから半年で活動自体は軌道に乗りつつありますが、現在の参加者はそのほとんどが北海道大学に所属する生物物理学会の会員です。今後は、ホームページ (<http://altair.sci.hokudai.ac.jp/biophy/>) などを通じた対外的な情報発信に力を入れ、参加者を増やしていくことが重要となります。北海道支部では、将来的に「夏の学校」を涼しい北海道に誘致することも視野に入れながら、この若手ネットワークが北海道地区における学会横断的な組織へと発展するように活動をサポートしていきます。（北海道大学 永山昌史）